

張文環の戦前の小説作品における新女性像 - 理想像から現実像への展開 -

北見吉弘 *

摘要

張文環は日本殖民統治時代を背景に多くの小説作品を残しており、今回、筆者が着目したのはそこに登場する新女性像に関する設定である。新女性は作者の青年時代における同年齢に近い存在で、その小説作品ではヒロインとしての登場が多い。多くは作者の分身として登場するインテリ男性の異性憧憬の対象となる傾向があり、人物像の造詣上におけるかなりの理想化が施されている。だが作者の作品発表が進むにつれ、新女性は徐々に俗世間的、現実的な様相を露呈し続け、遂にはヒロインたる役割を終える。今回は張文環の描いた新女性像を対象に、その造詣上の特徴を把握し、理想像から現実像へ転じた経緯、及び原因、根拠などを論じた次第である。

キーワード: 張文環、台湾文学、女性、新女性、短篇小説

* 育達商業科技大学応用日本語学科助理教授



The New Woman character existed before World
War II in the Novel Work by Zhang
Wen-Huan
About the Process of the Changes from an Eidolon
to a Realistic Person

Yoshihiro Kitami *

Abstract

Zhang Wen-Huan left many novel works backed by the colonist rule era in Japan. This article paid its attention to the person setting in the new woman image to come up there. The new woman is approximately of the same age as an author in the days of the youth, and there are many appearances as the heroine with the novel work. Most of them tend to become a target of the opposite sex admiration of intellectuals man characters appearing as the other self of the author. And profound knowledge by the idealization is seen on the profound knowledge of the characters. But whenever a work of an author is announced, the new woman character gradually strengthens the realistic side of the world and finishes the role as the heroine at last. This article intends for the new woman characters whom Zhang Wen-Huan drew, and also discusses the characteristic of these characters and then discusses process and the cause that varied from an ideal to a realistic of them.

**Keywords : Zhang Wen- huan, Taiwanese Literature, Woman, New Woman,
Nouvelle(Short story)**

* Assistant Professor, Department of Japanese, Yu-Da University



張文環在戰前所寫小說作品裡的新女性形象 ——從理想人物到現實人物之展開——

北見吉弘 *

摘要

張文環留下了許多以日治時代為背景的小說。筆者這次所著眼的是新女性形象之設定。張文環作品中所描寫的女性，是與他青年時期年齡相近的女性，在作品中多半以戀愛對象的姿態出現。這些女性的角色被設定成，以作者分身出現的男性知識分子所崇拜的對象。這些女性在人物形象的塑造上，多少是被理想化了。然而，隨著作品被發表之後，新女性角色漸漸地呈現出俗世、現實的樣貌，最後終於終結了作者小說中女神的角色。這篇論文將以張文環所描繪的新女性形象為主，掌握其人物塑造上的特徵，並論述從理想性轉變到現實性之過程、原因和根據。

關鍵字：張文環、台灣文學、女性、新女性、短篇小說

* 育達商業科技大學應用日語系助理教授



1、序

張文環の小説作品では、1920年代から1940年代の日本殖民統治期における台湾地方社会を背景に、新女性、伝統的女性、インテリ女性、媳婦仔といった女性人物が多く登場しており、物語の内容では往々に女性の恋愛、破局、縁談、結婚生活などをめぐる男性との関係が主となる。張文環小説ではこのように女性の生活が多く描かれていることに関連し、現在、これら女性人物像に関する先行研究もかなり多く見られ、それらの性格、思想性、生活、価値観、運命などにおける特徴が論じられている。今回、筆者が着目したのはその中で主に男性の異性憧憬に関わる相手女性として描かれた新女性における造詣上の特殊性である。

全体的に張文環小説における新女性像の登場は、公学校制度普及による女性の学校教育普及が大きな要因となるもので、学校での新教育を受けた女性は女性自立や男女平等を理解し、結果として反伝統的、個人主義的な思想性が芽生えた人物となっている。しかし、主に戦前から戦後間もない封建伝統が維持された台湾地方社会を物語の背景とすることで、作者の描いた新女性は社会的な反逆者的、または被抑圧的な人物となる傾向が強い。このことは、既に幾多の先行研究¹で論じられてきたものである。だが、張文環の新女性像に関して、それが初期作品である場合、主に男性の異性憧憬たる理想像としてヒロイン的役割を担っているのが特徴であり、新作の発表に伴い、作品の発表が新しくなるほど徐々に俗世間的な現実像へと変化し、最終的にヒロイン的立場を失う方向へと進展していることが伺える。このことに関しては現在のところ詳細な論述がなされていないと思われ、本論文の主旨とするのが、張文環の小説創作上における新女性像の性格描写における造詣上の共通性、そしてその理想像から現実像へと移行した造詣上の展開、またその理想像と現実像の違いにおける多様性を明ら

¹ 先行研究に関して

張文環の小説作品最近の張文環の小説研究(作品論と人物論を中心に)に限定した意味での先行研究を挙げておきたい。人物論においては封建社会や男尊社会に生きる地方社会出身の女性人物関連に関する研究が最も多く見られ、多少なり筆者の今回の研究の参考となるものである。最近の研究で主に関連性のあるものは以下の通りとなる。許惠玫「張文環小説的女性形象分析」、『台湾文藝雜誌』166、167期合刊本、1992。吳麗櫻「張文環小説中女性題材之研究」(中興大学中國文學研究所 在職班 碩士論文)、2004。張文薰「由『現代』觀想『故鄉』—張文環<山茶花> 作為文本的可能」、『台灣文學研究學報第二号』、2006。丁鳳珍「台湾日抛時期短篇小説中的女性角色」(成功大学中國文學研究所碩士論文)、1996。蔡瑩慧、「張文環の『山茶花』に見られる女性像—従順と抵抗のはざまに—」、『銘傳大學應用日語系碩士論文』、2008。陳英仕「張文環『山茶花』析論」、『臺北文獻』179、2012。上記の研究を見ても多くの研究者の張文環小説における女性人物への関心の高さが理解できる。



かにすることである。

2. 新女性像のヒロインたる存在に関して

2.1 時代背景と制作動機

張文環の小説作品における新女性の登場には、日本植民統治期間になされた公学校制度の普及、女性への学校教育の本格的に開始された時期が背景となる。この時期は1920年代から戦争開始間もない期間が背景となり、おおまかには張文環が生まれ故郷で過ごした少年時代から、台湾での学生時代、そして日本での留学時代にまたがるもので、新女性たる存在は作者が個人的に思春期から青年期にかけて同年齢の異性として意識した存在であったと言える。

今回の筆者が取り上げた張文環による小説作品の時代背景に関して言えることは、基本的には多くヒロイン的役割を担う新女性像が登場する各小説作品に共通した人物設定の主たるものとして、作品の主人公が作者の分身である書生男性或いは知識人男性として登場する作品に限られていることにある。即ち、1909年に出生した作者本人の1927以前の台湾地方社会での生活、及び1927年から1933年(東洋大学退学と言われる)における日本での留學生活、1938年台湾帰郷後から日本の参戦後数年の時期にいたるまでの生活が主となり、それらが作者の小説作品を題材としたものである。「父の要求」、「頓悟」の如く日本帝国による皇民化政策や志願兵制度の影響を受けた作品があるが、今回研究対象とした作品には政治政策を旨とする御用文学としての性格はさほど見られない。大まかに言えば、今回の研究が扱う張文環小説作品における制作動機とは、主に台湾社会における封建伝統の孕んだ旧時代的な問題点に目を向けたものである。具体的には、張文環の封建伝統批判はあくまで一家の長男が跡継ぎとされる世襲制度のありかたと男尊女卑の価値観に限られたものであり、儒教道徳全般に対する批判でないことをご了承願いたい。作者の封建的な世襲制度に対する批判は処女作「落蕾」から晩年の作「地に這うもの」に至るまで一貫して見られるが、そこに適齢期にある新女性の存在が関与した場合、それに通ずる男性側の身分や家柄が重視される封建的利害結婚に及ぶものとなっている。即ち本論文が本文で論じるところの張文環の伝統思想批判或いは儒教道徳批判というのは、男尊女卑を認める道徳観をめぐる封建的世襲制度、及び封建的利害結婚の有する女性をして被抑圧者に陥れる



問題を主としたものなのである。

要するに張文環の描いた新女性像の理想像から現実像への造詣への変化や移行においては、これら封建的結婚の受諾を運命付けられた作者と同年代と言う意味での当時の台湾地方社会出身である若年女性の生き方が反映されているものと仮定される。

2.2 主な新女性像の特徴

張文環張文環作品における新女性像は処女作「落蕾」から長篇「山茶花」、そして最後の小説作品となる「地に這うもの」等に登場しており、男女恋愛に関するヒロインとしての設定が多いのも、前述した作者本人の過去における生活体験が大きく影響したからである。また、それら新女性が登場する物語のほとんどに於いて、主人公たる人物が主に作者の分身、かつ学校教育を受けたインテリ男性となっていることもあり、物語の主軸としては往々にヒロインとの恋愛をめぐるロマンスの展開が見られる。ちなみに、これら男性主人公の生き方においては作者の自伝的要素が題材となることが濃厚で²、私塾や公学校で学ぶ少年人物、高校生や大学生たる身分の青年人物、そして大学卒業後の社会人といった登場がほとんどで、性格描写から思想性などに至り、同一の人格として描かれている。そして、いっぽうの新女性像に関しても初期作品では男性主人公と密接な関係を有する異性憧憬の相手として登場しており、男性主人公が少年期の設定の場合では勝気で男勝りな性格の初恋相手の少女として描かれ、主人公が成長して青年期に至った段階では公学校教育を通じ反封建的な価値観を養った恋人や片思いの相手として登場する。また、主人公の日本留学を終えた帰国後の場合では、すでに人生に熟練した新女性の力強い生き様が描かれている。このように少女時代に始まり、娘時代、そして結婚後の様子に至るまで描かれ続け、かつ、類似した性格描写を

² 比較的まとまった論述では柳書琴「張文環『山茶花』解説一部落から東京へ、進退窮まった植民地の青年たち」(『日本統治期台湾文学集成2 台湾長編小説集二』所収、東京：緑蔭書房、1999.7.20)が挙げられる。ここでは、「山茶花」を「間違いなく張文環の文学的自伝と言ってよい」(p.370)とあり、p.370～p.373にかけて「夜猿」、「過重」、「論語と鶏」、「父の要求」、「土の匂ひ」などの男性主人公に関する自伝的要素に論及している。とりわけ作者の学生時代から大学卒業後のいずれか或いは双方を描いた「父の要求」、「山茶花」、「地方生活」、「土の匂ひ」などの主人公は医学や法学といった実利重視の学問を否定し、思想や文学を愛好し、またそれを専攻する設定となり、その人道主義的な信念のもと勉学に勤しむ態度は作者本人のものに共鳴する。有名などころでは「父の要求」が挙げられ、中島利郎が「自伝的要素の濃厚な作品」(『日本統治期台湾文学 台湾人作家小説集』第四卷〔張文環〕p.338)と論じているように、内容に於いて描かれた主人公の日本留学中における左翼系の運動に参加し警察に検挙された経緯は、作者が実際に日本で文化サークルを組織し検挙されたことを題材として生かしたものである。



以って造詣された女性像は、張文環の作品では新女性像以外には見られない。

3. 張文環作品における新女性像の誕生とその理想的造詣

3.1 新女性—処女作「落蕾」、及びその後の作品における登場

張文環小説における最初のヒロインは処女作「落蕾」の秀英である。この人物は公学校卒業生であり、主人公義山(作者の分身)の恋人としての設定である。「落蕾」は短編ながら二部構成(第一部「別離」一～五、第二部「墮胎」一～二)で書かれた作品で、第一部「別離」では日本留学に臨む義山と秀英の公学校時代に始まる恋人関係、そして義山の日本留学と秀英の結婚問題による破局が主な内容となる。第二部「墮胎」は義山の日本留学出発後の設定で、残されたヒロイン秀英が主人公となり、親の設けた金持ち男性との縁談の受諾、義山との関係で発覚した妊娠への対処と密かに墮胎した経緯が書かれ、そして最後は結婚相手に墮胎がばれて婚約を破棄された様子が描かれている。物語そのものは秀英をめぐる恋愛悲劇となり、秀英は利己的で貞操観念のない不埒な女性としての印象を読者に与える。だが、実際、秀英には新女性特有の理想化が施されているのも事実であり、作者の描いた新女性ヒロインとして共通した反封建的な生き様が示されていることが往々に見過ごされていると思われる。以下は公学校時代から交際を続けた義山との別離を決意せざるを得なかった秀英の本意が示された箇所引用である。

貴方はもつと勉強したい。金が無くても獨學の積りで行くと、明仲さんに勧められて決心したぢやありませんか。それに反して妻は毎日の生活に肉體的にも精神的にも、腸を千切られるやうに削られて行くぢやないの。それでも妻にこれ以上、社會に反抗する力を出せと云ふの。兩親や弟を日干しにして……。³

秀英は公学校時代においてクラスメート達から「文學少女」⁴とみなされた知的な女性で、新教育を受けたことで封建伝統の有する矛盾も十分に理解していた。結果的に

³ 張文環「落蕾」、『日本統治期台湾文学 台湾人作家小説集』第四卷〔張文環〕、東京：緑蔭書房、1999年7月20日一版、p.17。

⁴ 同注3、p.22



は地方社会出身であることから封建伝統の抑圧に逆らえず、不本意ながら親が手配した金持ち男性との結婚を受け入れたかたちとなったが、少なくとも秀英のそれまでの生き方には不合理な封建的婚姻制度に対する反抗精神が強く示されており、引用の「これ以上、社会に反抗する力を出せ」という一言には、人物が絶えず封建的な圧力に対抗したという生き様が感じられるのである。

ただし、これら新女性が地方社会出身者に限定されていることで、そのヒロインたる理想的姿を維持できるのは、結婚適齢期以前に限られており、実際「落蕾」発表後の作者の小説作品に登場する新女性像が往々に少女時代に限定されたことが裏付けとなっている。以下は新女性の少女時代を描いた主要な作品(発表年月順)と人物像に関するラインアップである。

作品(発表年月)／人物／主人公男性との関係

- 「論語と鶏」(1941.9)／嬋／私塾の先生の娘、幼馴染、初恋の相手
- 「夜猿」(1942.2)／阿美／幼馴染(主人公の初恋の相手としての雰囲気を感じられる)
- 「頓悟」(1942.3)／阿蘭／主人公が短期間住んだ家の隣近所にいた一少女であり初恋相手
※娘時代に至ると主人公の片思いの相手の設定
- 「山茶花」(1940.1～1940.5)／娟／隣近所の一少女、幼馴染、潜在的な意味での初恋の相手
※娘時代に至ると主人公の恋人の設定

以上の四作品の新女性は、全てが男性主人公の初恋相手(或いはそれに近い存在)として描かれた人物である。四作品のうち主人公男性の少年時代と青年時代が描かれた「頓悟」、「山茶花」では、ヒロイン側にも同様に少女時代と娘時代の双方が描かれている。主人公は、「落蕾」義山と同じく作者の分身的な要素を濃厚にしており、人格、思想性、価値観すべてが一致し、同様にヒロインの自由奔放な性格や反伝統的な言動に魅かれる思春期の設定となっている。

まず、「論語と鶏」においては、主人公源の嬋に対する性格描写の様相からみて、新女性がヒロインとなる主な要因がその反伝統的性格にあることが伺え、この性格的特徴こそがその後の作品にも共通するかたちで、男性にとって異性の魅力を感じる要となっ



ている。

嬋はまた源がいやに大人つぼく見せるものだと思つて、自分のまだ娘々とした態度で源にいろんなことをいひつけたりした。(中略)「源、あたいあんたのお嫁さんになるのよ。」或るとき、花嫁のままごとに誘はれて、源は不安な気持ちで胸をどきまきさせながら嬋の後ろに従いて歩いた。先生が見てみはしないかとあたりに氣を配つたが、嬋はかまはずに源の手を引つ張つて急ぎ出した。こんなに我が儘な嬋と、きびしい先生との父娘のあひだの生活を源はいつもふしぎに思ふのだつた。⁵

女性側の異性に対する積極的な好意の表示は、伝統社会では婦徳觀の欠如した行為とみなされたが、このような伝統にとらわれない豪放な性格こそが後に「山茶花」において娘と成長した娟の反封建的な生き方の軸となり、かつ自由恋愛に憧憬する男性主人公の異性願望と合致するものとなる。その男勝りで豪放な性格描写は、いずれも男性主人公の初恋相手として描かれた少女人物の「夜猿」阿美、「頓悟」阿蘭(少女時代)、「山茶花」娟(少女時代)に共通する。⁶このうち公学校就学を背景に描かれた少女人物が「山茶花」娟である。ここでは新教育を受けた知識人たる意味での性格づけが濃厚となる。以下は少年時代における主人公賢の目線からの描写である。

娟はいやにこざかしいきざな娘だと思つた。しかし子供達の人気を獲得するには娟を無視することもできない。一体に娟は賢の目から見れば憎らしさうな子である。彼女にはまるで世の中には恐いものがないやうに男の子の頬つぺたでも平気で撲ぐるのである。公学校へ入学した匆々まで第一学期も終らないと云ふのに、先生は娟を級長にしようと云ふので賢は娟を嫌ふやうになつた。むろん娟の勉強の偉さは好意がもてるが、優しみのない女の子はこれも化け物のやうで嫌ひだつ

⁵ 張文環「論語と鶏」、『日本統治期台湾文学台湾人作家作品集第四卷[張文環]』、p.337。

⁶ 「夜猿」のヒロイン阿美は物語においては、作者の分身かつ主人公として登場する少年哲の一家と交友のある「お伴侶の婆さん」(張文環「夜猿」、『日本統治期台湾文学 台湾人作家小説集』第四卷[張文環]p.189)の孫娘としての設定で、哲と幼馴染の関係にある。「おきやん」で「男の子みたい」(p.193)な少女として描かれ、その自由豪放な魅力に「民は阿美が好きになつた」(p.193)様子が描かれている。また、「頓悟」のヒロイン阿蘭に関連する引用は以下の通りである。「晴着を着、轎に乗つたせみか。おしまな阿蘭はひどくすましてみた。私は他の子供達と一緒になつて、阿蘭の家の戸口に立ち並んでそれに見惚れてみた。見てあるうち、なかの一人が阿蘭がお嫁さんに行くんだい、と冷やかしたので、阿蘭は忽ち眉を逆立て、ぺつと私達に向かつてつばを吐いた。」(張文環「頓悟」、p.225)ここでは主人公(為徳)が少年時代において関わった阿蘭のまだ「七歳」だった段階におけるのものであり、同様に為徳の目線からの描写となっている。



た。⁷

ここには主人公賢が幼馴染である娟に対する最初の印象が示されているが、このような男性側の少年期における異性への印象に関しては「論語と鶏」から「頓悟」まで常に描かれた傾向となっており、娟が賢の初恋となることを暗示、連想させるものと言える。また、新女性特有の知的な側面が強調されているのが新たな特徴となり、ここには更に新教育での学業に秀でた様子、そして現代的なインテリ女性としての可能性が示され、男性主人公と新思想的な価値観を共有する人物として、その理想性がより高められている。

以上、四人のヒロインは大胆で負けん気が強いといった性格描写が施され、脱封建を匂わせる女性の尊厳獲得や自立、封建的婚姻制度への反抗、そして「落蕾」秀英の如く男性側の異性憧憬の象徴たる自由恋愛の実践が期待される人物となっているのが特徴である。

3.2 ヒロイン造詣における理想化

ヒロイン像の理想化が意味するのは、それが作者の理想概念を多大に含む主観性の産物であること、或いは当時の若年女性一般と異なる意味での普遍性や客観性の欠如ということの双方の要素が挙げられる。まず、張文環の新女性ヒロインであるが、これらが当時の新女性一般と異なるのはその性格描写を見ても明らかであり、作者が意図して反封建的な人物造詣を心掛けたと考えられる。その際、男性主人公の立場にあった理想像としての虚構的側面が強く感じられ、実際にモデル的存在があったことを仮定しても、作者の自伝的要素の範疇に限定された人物に過ぎないものである。いずれにせよ普遍性や客観性の欠如は疑えないものであるが、これら人物像の理想化に見られる非現実性として以下の二点が挙げられる。

一、**非凡な性格**：伝統的地方社会で生きる女性は伝統的風習に従い、儒教の婦徳観を守り、適齢期には親の決めた相手と結婚するのが一般的であり、社会的罰則を恐れそれに背く女性はいなかった。だが、作者はこのような伝統的な風習をして女性を拘束し自由を奪う悪弊だとみなす見解を往々にその小説作品で主張している。新女性

⁷ 張文環「山茶花」、『日本統治期台湾文学集成2 台湾長編小説集二』、東京：緑蔭書房、1999.7.20、一版、p.41。



像の性格描写が反伝統的な色彩を濃くするのもこのことに関係しており、封建的利害結婚に対処すべく、それに臨む女性は男性に従順であるべきで、おとなしく控えめで内気であることを美德とする伝統風習への批判があることが拒めず、また、「山茶花」までの新女性ヒロインがその社会的反抗として男女の自由交際を手段としたのも、実は「落蕾」、「山茶花」などの男性主人公の異性憧憬に合致したものであったからに他ならない。作者の分身たるそれら男性主人公は多くが金儲けに縁の無い文学・哲学専攻で、立身出世が見込めず⁸、常に資本家階級や特権階級に対する不満を抱えながら、封建的利害結婚の敗者的立場に甘んじていることから、特に異性願望の妨げとなる封建的利害結婚に対する反感はとりわけ強いものとなっている。

即ち、女性ヒロインが反伝統的な反骨的な性格を有したのは、それら女性の生き方を男性主人公の境遇に合致させたいという作者の意図があったことが十分に考えられ、そのことが新女性ヒロインをして反伝統的な精神とそれを実践しうる虚構性を含む人物像に造詣したものと考えられるのである。

ただし、作者の新女性がその男性の異性憧憬における理想的たる姿が示されたのは封建的利害結婚の圧力がのしかかる結婚適齢期以前に限られたもので、ここに新女性が男性の異性憧憬たるヒロインとして、かつ主人公男性にとっての理想的姿の維持における限界があることを理解する必要がある。

二・思想と実践の一致： 作者はその小説作品において封建制の支配を受ける地方社会を背景とすることに一貫性を持たせているが、作者がこれら地方社会出身の新女性に求めたのは新時代に適応すべく要となる脱封封建であり、利害結婚を否定する意味での恋愛結婚の実現に他ならない。だが、客観的な意味での女性達は無抵抗に自身の理不尽な運命に甘んじるのが常であり、それは当時の台湾社会における新女性一般にも言えることであった。作品「芸姐の家」には、公学校卒業生である采雲と秀

⁸ 以前の中国では庶民出身の唯一の立身出世が科挙試験合格による官吏登用であった。その構図は作者の青年時代である台湾社会においては進学を主とする高学歴取得と資格試験合格へと変わる。「山茶花」において「母の云ふ立身出世は多分昔と同じやうに、男は先づ秀才の試験に通じ、せめて県主くらゐ出世してもらはねばならない」（「山茶花」、p.247）とあるのは、庶民階級の親が息子に示したところの立身出世の願望の一例であり、またその父母が望むのが弁護士、訓導、医者になるべく高学歴取得と資格試験合格である。「山茶花」の主人公が村で初めての高校生となった際、その専攻が周囲の期待した医学でなく文学であり、また弁護士になれる見込みも無いことで作品には「親類達も大して喜ばなかつた」（「山茶花」、p.241）様子が描かれているが、このことは当時の世間一般がみなす男性知識人の出世コースが医者、弁護士、役人、教師などの身分になることを意味している。ただし、この価値観は多くが親から継承すべき生活手段としての資産のない無産家階級に属するものであり、それら庶民出身の男性知識人が脳裏に描く立身出世とは、最低でも生活と収入の安定した家庭経済の維持できる身分になることを意味した。



英の間における会話の一場面が描かれ、「殊に恋愛問題に就いては随分に造詣深くかんじられた」⁹とあるが、この新女性二人は「恋愛至上主義」に興味を示しながら、結局は自由恋愛をめぐる願望が理論的段階に留まるだけで、理想実現のための具体的な実践に移すには及ばなかったことを作者は暗示している。即ち、当時の新女性一般には理論と実践の一致がなかったことを意味しているのである。当時では自由恋愛は反道徳的とみなされ、女性に対して厳格な封建社会において、たとえそれが新教育を受けた新女性であろうが、あえて身の破滅を招くような行為を実践する女性はいなかったと見るべきである。

だが、作者がヒロインとして登場させた新女性像はこの点が異なるものである。「落蕾」秀英は世間から隠れるかたちで愛する男性との愛情を育み、不意な妊娠をするまでに至る。ただし、秀英には新女性としての理想と展望があったことは「最初は二人の力で境遇を征服すると誓ったぢやないか」との一言からも伺え、秀英の自由恋愛を犯した動機は必ずしも批判されるべきものではない。¹⁰ただし、男女の自由交際は封建社会では厳禁であり、それを犯した女性には背徳な女性として社会から被る相応の処罰を覚悟せねばならないことも事実である。秀英が自由交際を望むことは儒教道徳による拘束を脱する意味での女性解放の価値観があり、物語における秀英の自由恋愛願望に対して、作者は反伝統的なありかたを理由にそれが間違った行為であるという明確な見解は示しておらず、あくまで秀英に対する批判の所在を恋人義山との関係を清算し、金持ち男性との結婚を決意し臨んだという思想性の変化と新たに芽生えた打算主義的な考えに定めているのである。即ち、秀英の男女自由交際には「盲目的」¹¹という若者特有の未熟かつ非理性的な側面があったにせよ、その段階に限っては封建社会への反逆者たる理想的な存在として想定され、社会の不合理に対処する新時代の女性たる存在感が強く示され、ヒロインとしての理想像に十分に足りるものであったと言える。

その実、秀英の如き新女性とは逆に、張文環の小説作品においては親の命に従い嫁いだ女性人物も多く登場しており、例えば戦前の発表である小説作品に登場したヒ

⁹ 張文環、「芸姐の家」、『日本統治期台湾文学 台湾人作家小説集』第四卷〔張文環〕、p.126。

¹⁰ 同注3、p.15

¹¹ 以下は関連箇所引用である。「義山は級で級長だった。明仲は副級長であつた。当然彼女は義山とは境遇も同じ位だから、身分の違ふ明仲よりも彼女は義山へひそかに心を寄せてゐた。今日迄の發展は盲目的と云へば盲目的で本能的だった。」(同注3、p.20)



ロイン像では「みさを」翠鳳、「闍雞」月里、「山茶花」錦雲の如く、儒教の婦徳觀に従順で忠実であり、周囲との協調の為に自我や理想を捨てた運命論的な生き方が描かれ、それら女性人物の生活は極めて孤独で人間性を無視された被抑圧者的なものとなっている。ここには、往々に作者からの弱者的立場に置かれた女性に対する同情や愛惜の念が示されてはいるが、男尊女卑を認める封建伝統に対する批判に関する意味で、同時に伝統的女性に共通した無抵抗主義的とも言える伝統女性の生き方に対する作者の批判が強く示されていることにも留意すべきである。

前述した如く、作者がこれら新女性像に社会的な反逆者たる特殊な性格付けを施したのも、支配者的な封建勢力に屈せず、男尊社会で虐げられた女性の被抑圧者的立場からの離脱が期待されたからでもあり、最終的には封建的利害結婚の抑圧を克服することが意図されていたものである。「落蕾」秀英と同じく「山茶花」娟も周囲からの反目をよそに、愛する男性主人公と恋人関係を築いた女性の設定であり、このことが要因となり、少女時代から娘時代に移行した段階での娟の娘時代における造詣には作者による相当な理想概念が込められていると思われる。以下は男性主人公賢の目線より描かれたちようど娘へと成長したばかりの娟の様子である。

しかし娟は實に物靜かに物を觀察し、そしてふかく考へてから物を言ふのである。何んだか娟は先天的に教育をうけてきた娘のやうに、かしこいばかりでなく、高尚な稚氣のある花のやうに、娟の體全体から香ばしいかほりが匂ふやうに娟の姿がすがすがしく見えて、賢は心のなかで可愛い妹と叫びつゞけてゐた。¹²

ここには自由恋愛に憧憬する男性主人公の自由恋愛実現における喜悅の様が感じられる。以上の引用は破局前における「落蕾」秀英と義山の関係の再現であるが、「山茶花」娟の描写がより理想的となっているのは、秀英の如く親の命による封建的利害結婚に屈せず、終始にわたり封建勢力に対する反抗を示したことにある。以下は作品よりの引用である。

娟は大学生と東京へ行く女の先生の境遇がむしろ羨ましかつた。(中略)女の先生が云ふには、東京の娘は、女中までして、女子大学を出てゐる。娟は先生に女中の仕事を見つけてもらへないだらうか。¹³

¹² 同注7、p.258。

¹³ 同注7、p.66。



「山茶花」娟が意図する都会進出の思惑は「落蕾」秀英の至らなかった脱伝統社会における更なる展望であり、かつ「女子大学」での就学を通じた女性の自立ならびに女性解放の実現でもある。ヒロインの少女時代における男勝りな性格に関しては前述した如くであるが、娟の場合、その公学校就学における様子として、公学校時代にクラスで一、二の優秀な成績を収め、クラス担任からの信頼も篤く、級長を任されるほどの人物とまでに描かれたのは、作者のヒロインに対するより一層の理想概念が込められていたからであり、具体的には引用にある“女の先生”の如く、愛する男性と自由恋愛を実現し、かつインテリ女性としても社会的な尊厳を勝ち得た存在がモデルとなるものであったからである。

作者の全ての小説作品を見ても、既婚女性の不倫を題材とした作品を別にすれば、果敢に自由恋愛を実践に移した女性は「落蕾」秀英、「山茶花」娟といった新女性のみに限られる。これら新女性が公学校で優秀な成績をおさめ、かつ自己の理想実現のために反封建的行為を実践に移したことは、まさに男性主人公にとっての異性関係をめぐる理想実現をも意味することは言うまでもない。

4. 張文環作品におけるヒロイン像の展開とその現実的造詣への移転

4.1 新女性—「山茶花」及びその後の作品における登場

娘に成長し適齢期にあった「落蕾」秀英が選択した自由交際の放棄と封建的利害結婚受諾に見られる如く、封建社会に生きた女性にとってその最終的な男性選びはやはりその男性本人の身分的条件や経済力、将来性などを基本にするものである。要するに、より好条件である縁談を勝ち取り、将来的に自身の生活基盤を確かにすることが要であったと言える。このような伝統社会における男性選びの普遍的な基準は少なからず新女性ヒロインが娘に成長した段階での心理的な悪影響としてあらわれるものである。即ち、作者の作品で少女像としての登場となる新女性はその少女時代において自由豪放な魅力的な性格であったのは、現実的な意味での結婚を意識する年齢に達していなかったからに他ならず、いったん適齢期になり現実問題としての結婚そのものを意識するようになってからは、往々に利己的、打算的な要素が強められた性格面での歪みが顕著となり始め、その本来の理想的なイメージに翳りが生じるようになる。作品



「山茶花」における新女性ヒロインをめぐる特徴は、一つは前述の如き新女性の魅力的側面の描写であり、特殊な性格、理論と現実の一致といった理想的側面であるが、肝心なのが、もう一つの特徴であるところの人物像に込められた理想性が結婚適齢期に至る前の段階に限られていることである。それは、人物像が結婚問題を切に考えた頃合を境に、より実質的な特徴を有するに至った現実的存在への転落することを意味する。作者の作品における男性主人公はそれを人間性の墮落とみなしているが、あくまで恋愛において相手女性に裏切られた被害者の主観的立場によるところが強いと思われる。とりあえず、「山茶花」において張文環は伝統的女性として登場させた姉の錦雲との比較を通じ、ヒロイン娟の娘と成長した段階における非理想的かつ現実的なあり方を示すに至る。以下は結婚適齢期になり結婚を意識した娟に関する性格描写である。

このごろ娟が素直に見えるのは、ずるくなつたせみだと姉はかんじるやうになつた。彼女の思つてゐることはやつぱり我儘なことばかりであつた。しかし今までのやうに一本調子でなく、うまく人の隙を狙つて自分の感情を押し出していくやうであつた。人間の感情が人間の感情の好き陰をつたつて歩く巧妙さには錦雲はあきれて了ふのである。もし娟が男であつたら姉は妹を末恐ろしい姿に思はれて仕方なかつた。¹⁴

少女時代から主人公賢人との恋人関係確立までにかけて、常に魅力的な女性として描かれた娟であったが、適齢期の娘へと成長するにつれ、自己の脳裏には封建社会に生きる女性の将来性や一生を左右する縁談や男尊社会に対する警戒が強くなる。少女時代においては豪放で、自主的、負けん気が強い、男勝りといった理想的な意味における性格面が強調されたが、ここでは転じて狡猾で打算的、利己的、自分勝手といった俗世間的、反人道的な側面だけが強調されているのが主な新女性像の性格面の変化の特徴である。このような性格上の歪みが要因となり、やがて主人公賢人の破局をもたらし、物語のラストでは、賢から「君はものを遁走的に考へて、卑法的に似た手段ばかり取らうとしてゐる」¹⁵といった批判を受け、男性の理想像たる対象外となり、異性憧憬の対象たるヒロイン的役割を失った様子が示されている。

即ち、「山茶花」は作者の新女性に対する理想的側面描写が最大限に施されなが

¹⁴ 同注7、p. 193

¹⁵ 同注7、p.338



ら、かつ、結婚適齢期に至った頃合を境にその非理想的な性格面も描写された作品なのである。そして「山茶花」を最後に作者の新女性像は理想的な女性たる描写が終焉し、その後は新たな発展を遂げることとなる。以下は主要な作品と人物像のリストアップ（発表年月順）で、年齢では結婚適齢期、或いは既に結婚後の設定となる。

作品（発表年月）／人物／主人公男性との関係

- 「山茶花」(1940.1～1940.5)／娟(娘時代)／恋人
- 「地方生活」(1942.10)／淑／義理の妹
- 「土の匂ひ」(1944.7)／阿鶯／知人

新聞連載による長篇「山茶花」に続き発表された「地方生活」では、「山茶花」娟の性格を引き継いだ淑が新たな新女性の設定となり、その比較対象として学校教育を受けられない伝統的女性の婉仔(淑の姉)が設けられている。姉が旧女性、妹が新女性という人物設定は「山茶花」における錦雲(姉)と娟(妹)の関係がそのまま引き継がれたものであるが、異なるのは男性の愛情を得る対象たるヒロイン的な役割が妹(新女性)から姉(伝統的女性、旧女性)に替えられていることである。前述の如く、作者にとって新女性のヒロイン的な役割は「山茶花」における男性主人公である賢の日本留学開始をもって終焉しており、そこには男性の新女性に対する自由恋愛願望の幻滅も含まれている。この「地方生活」及び「土の匂ひ」では作者の目線が日本留学後から大学卒業後の社会人になった段階の主人公の立場に置かれ、ここには少年期や公学校から高校までの学生時代に懐いた反封建的な思想性や近代的生活(都会的生活)への憧憬が払拭され、男性側が生まれ故郷で生活基盤を確立せんとする決意が示されている。また男性の恋愛対象たるヒロイン的存在が新女性から伝統的女性へと移行された設定も共通しており、「土の匂ひ」の場合では男性主人公の輝の恋愛相手としての登場が、伝統的女性として設定された結婚生活に失敗した出戻り女性である玉鑾がそれに相当する。そして、肝心の新女性としての登場が阿鶯であり、「山茶花」娟、「地方生活」淑の性格を継承した延長上の人物となっている。阿鶯の未亡人としての設定は「落蕾」秀英と「山茶花」娟の成長に合わせたもので、男性主人公が日本で大学を卒業し、帰国後に都会での職探しを経てから生まれ故郷へ帰郷した頃の年齢と大体においてつりあう。また、阿鶯は女性として封建勢力に立ち向かい、嫁ぎ先から相当額の金をせしめ取り、それを元手に株式会社の女性経営者として成功した人物であり、その成功に



は多分に新女性特有の大胆で豪放な性格的特徴が関連したものとなっている。

以上、三人の新女性に共通するのが、主に前述した往来の新女性像と類似した性格描写がなされていること、そして、その性格を基本に徐々に封建社会に打ち勝ち適者生存を実現する発展を見せていること、更にいずれも男性主人公が作者の分身たるインテリ青年となっていること等である。

4.2 新女性の人物造詣における現実的様相

作者の小説創作においてに反封建的な新女性の存在感は大きく、「山茶花」娟の後、同種の女性として「地方生活」淑、「土の匂ひ」阿鶯が描かれたのも常に作者の脳裏に少年期青年期にかけた恋愛対象としての思念があったからであろう。だが、それだけ新女性との破局は男性にとっての心の痛手でもあり、その結果、日本留学後の男性主人公にとっての新女性に対する新たな印象は封建社会に対する大胆な反抗者という面目を残しながら、同時に個人の至福を第一義とする利己的、反道徳的な存在だといったものであった。以下は「地方生活」淑の性格描写に関連するものである。

婉仔も物心つく頃から、澤の嫁になると云はれてゐるので、特別王家には親しみを持つてゐるが、本能的に遠慮ぶかく、引込みがちで大膽に振るまはれなかつた。しかし淑は、王同年嬢さんの娘とも同じなので、駄々をこねたり、強んだりするやうな我儘な娘であつた。¹⁶

「地方生活」は作者の分身として登場した男性主人公が円満な男女関係と結婚を実現した唯一の作品である。上の引用を見ても、婉仔の古典的女性たる性格、教養ともに優れた様は「山茶花」錦雲の分身であることを連想させるに足りる。そして、淑の場合、その性格描写は「山茶花」娟の適齡期にあったときのものと一致する。これら両者をめぐり、作者は姉である婉仔の持つ「道徳観念」を「精神の力」¹⁷として認め、もう一方の妹の淑に対しては「現代的な女は案外精神力の乏しいことが澤は知つてゐた。健康な體に似はず、享樂を貪ぶりたい性格を澤は恐れてゐた」¹⁸と論じている。

「地方生活」が主題として扱うのは、一つが男性主人公の都会進出を断念した後で

¹⁶ 張文環、「地方生活」、『日本統治期台湾文学 台湾人作家小説集』第四卷〔張文環〕、p.279。

¹⁷ 同注16、p. 285

¹⁸ 同注16、p. 291。



の故郷における人生の再出発であり、もう一つが新女性の利己主義的、反道徳的な生き方である。張文環には男性側に対してはあくまでもその人間的成長を基に、近代的から伝統的への思想変換がなされた社会人たる存在として、それまでの人物像の延長として描いたのに対し、女性側に対しては理想的と非現実的な要素が合わさった主観的存在としてではなく、現実的、近代的かつ客観的な存在として、それまでの流れにあった新女性像を一新して別の角度から描こうとする姿勢が見られる。そのため、ここには往來の作品とは異なる男女間の思想面での価値観の違いが明白となり、かつて男女両者が共鳴した反封建制度をめぐる脱封建の思想性はすでに存在していない。ここでの関連した新女性像に関して言えば、それら人物像の共通した性格描写を基点に、人物が成長し適齡期に近づくにつれ、結婚に対する意識が強まり、ヒロインたる理想像からヒロインらしからぬ現実像へと移行した動機や経緯が伺える。以下はその変化をめぐり関連する女性像を分類したものである。

●理想像(少女時代)

作品及び代表人物:「論語と鶏」禪、「頓悟」阿蘭、「落蕾」秀英(公学校時代)、「山茶花」娟(公学校時代)

反封建主義的思想:人道主義的

具体的実践:愛する男性への愛情表明

将来的展望:自由恋愛

●理想像から現実像へ(結婚適齡期の娘時代)

作品及び代表人物:「落蕾」秀英、「山茶花」娟

反封建主義的思想:人道主義的から反道徳的、利己主義的へ

具体的実践:愛する男性との自由交際、条件の良い男性との縁談の獲得

将来的展望:身分的、経済的に将来性の望めると男性との結婚

●現実像(縁談成立から結婚後)

作品及び代表人物:「地方生活」淑、「土の匂ひ」阿鶯

反封建主義的思想:反道徳的、利己主義的、現実主義的

具体的実践:高學歷取得、将来性の約束された男性との結婚、家族や親戚を相手取った財産分配の主張

将来的展望:女性としての経済的生活基盤の確保



理想的新女性が描かれた初期作品(処女作「落蕾」は除く)、続いて理想像から現実像の移行を描いた「落蕾」、連載長篇「山茶花」、最後は現実像を中心とした「地方生活」、「土の匂ひ」と続き、「落蕾」以外は凡そ作者の作品発表年度順に整理され、主に女性の年齢と創作の発表が同時に進行している。これらはまた主に男性主人公の成長(少年期→青年期→成人期)に合わせた設定でもある。ただし、すべてが戦前の作品に限られるもので、戦後の作である「地に這うもの」阿蘭は含まれない。この作品における阿蘭は大胆な性格描写や公学校での成績優秀な様子が示されかつての新女性ヒロインの延長上にある存在となっはいるが、往來の作品に共通した書生たる身分の男性主人公(即ち作者の分身)の設定はない。それは、作者にとっての男性主人公の生き方が「地方生活」澤、「土の匂ひ」輝清ら人物の生まれ故郷での生活基盤の確保をもって落ち着いているからに他ならない。

やがて現実像へ移行した最後の段階においては「地方生活」淑、「土の匂ひ」阿鶯が挙げられ、共に地方社会の出身者であり封建制度の反逆者という背景はその他全ての人物像と変わらないが、前段階の「落蕾」秀英、「山茶花」娟と大きく異なるのは、非現実的な自由恋愛を価値観と認めず、女学校進学という高学歴を手段に己の価値を高め、積極的、かつ果敢に封建的利害結婚に対処したことである。張文環小説作品における新女性が高学歴取得を願うのは、インテリ女性としての社会進出や尊厳獲得による女性解放でもなければ、また「山茶花」娟が思い描いた都会生活でもなく、主に「二人の花嫁」阿嬌の如く「インテリ女性」¹⁹たる名声を手段に条件の良い縁談を獲得することにあり、人物像は現実主義的、個人主義的な思想性をより強めている。また、「地方生活」においては、「某美術研究所の女留學生」たるインテリ女性が男性主人公である澤の日本留学期間における片思いの相手として設定され、この人物像を通じ、作者は男性主人公の新女性崇拜への幻滅を示すと同時に、それら高学歴を得た新女性をして「現代女性の虚榮の縮圖」²⁰を体現した俗世間的人物として非難している。即ち、ここに作者にとっての客観的一般的な新女性の考え方が提示されていると判断できるのである。以下、この新女性の性格面の特徴を踏まえ、現実像として描かれた「地方生活」淑、「土の匂ひ」阿鶯に関して論を進めたい。

19 張文環、「二人の花嫁」、『日本統治期台湾文学 台湾人作家小説集』第四卷〔張文環〕、p.95。

20 同注16、p.282。



「地方生活」淑は女学校卒業を手段に「醫者の玉子」²¹との縁談を実現した女性である。作者はその性格的特徴を示すべく、物語の結末近くに淑の遺産相続の遣り取りをめぐり一家上げての騒動となる場面を設けている。医学専門学校の学生との結婚式を目前とした淑は、将来の嫁ぎ先における安定した生活のため、その嫁入りの持参金の確保を目的に、病床の父親に対し「兄さん達は全財産の半分づつ分けること。そして私達姉妹は十分の二で二人で分けることをはつきりと書いてほしいの。でないと後でかへつて面倒になるでせう」²²と、遺産相続の取り分を主張する。ここには新女性の特徴たる個人主義的な価値観がもたらした反伝統的、反道徳的な行為を伴った飽くなき生存への意欲が表れている。この作品では新女性はすでに男性の相手役のヒロイン的存在として描かれていないが、結果として作者の理想概念が払拭され、新女性特有の反封建的な大胆で豪放な、また、利己的で打算的な性格的な特徴が直に示されたものとなった。

続く「土の匂ひ」阿鶯は実質上における「地方生活」淑の結婚後の姿を想定して描かれた人物である。「顔が圓くて、二重まぶたの目はいつも情熱をたたへてるやうに見える。それがいやみではなく、ただ山氣たつぷりなものを感じさせて、金儲けの上手な、隅に置けない女」²³という描写も往来の新女性ヒロインの性格的特徴及び「地方生活」淑の持つ個人主義的、打算的側面を受け継いだ人物であることが分かる。すでに既婚女性の設定であり、夫の死去の際、婚家に対し「財産は子供の將來の為に必要なのです。子供がゐなければ、私は夫の對年が終れば再婚しますよ」²⁴と財産の取り分を要求した場面設定は、淑の実家に対する遺産相続権主張の場面と重なる。

「地方生活」淑、「土の匂ひ」阿鶯は作者による男性側の願望たる自由恋愛憧憬の寄託がなくなり、往来の作品に見られた人物像のロマン主義的要素のいっさいが排除されたことにより、封建的利害結婚に真正面から対処する孤軍奮闘の立場に置かれ、そのぶん往来のヒロインに比べ、思想性の実践能力や社会適応能力をより強めている。「落蕾」秀英、「山茶花」娟ら、かつてのヒロインが悲劇的人物となった要因である封建的利害結婚への対応とその失敗にしても、主には書生たる身分の男性主人公の非現実的な恋愛願望と将来性の見えない立身出世があったからであり、かつ、そのよう

21 同注16、p.305。

22 同注16、p.306。

23 張文環「土の匂ひ」、『臺灣文藝』七月號(一卷第三號)、1944年7月、p.32。

24 同注23、p.32。



な男性に自身の理想的生活実現の願望を託した誤った判断にあった。すなわち、「落蕾」秀英、「山茶花」娟らの、封建的利害結婚に対する態度は逃避的なものであり、いかにして問題に対処し克服すべきかの姿勢に欠陥が見られ、その結果、社会的な脱落者としての破滅を余儀なくされたものであった。それに対し、「地方生活」淑、「土の匂ひ」阿鶯の場合は封建的利害結婚の弊害を避けられない問題、即ち、不合理な客観的事実であると認めた上で、たとえ利己的で反道徳的であろうが、敢えてそれに果敢で反道徳的ながらも合理的な対処をしたことで、結果的にはその性格面における特殊性が適者生存に向けて大いに生かされ、封建社会に屈することのない勝利者たる結果を勝ち得たこととなった。「地方生活」淑、「土の匂ひ」阿鶯のいずれも封建伝統から逸脱した存在となり、これらは伝統社会での生活基盤を築こうと意識する男性主人公にとっては、既に価値観が共有できず、生き方に共鳴ができず、もはやかつての如く恋愛や結婚の相手とするには別の存在となっている。このような若者の異性問題に関しては、新たな新女性側からも同様のことが言え、それら伝統に忠実で、生活基盤の脆弱な主人公男性は、とりわけ結婚を念頭に置いた異性として自身の興味を引く存在には成り得なかった。

以上、作者の新女性像はその優れた社会適応能力が示され、かつ新時代に適応可能な新女性の魅力を示しつつ、その代価として作者によりその狡猾さと打算的価値観をより強く持った人物としての客観性が強められ、理想像から現実像への失墜が明確に示されたかたちとなったわけである。

5. 張文環作品におけるヒロイン像たる 新女性像造詣の限界

前述した如く、新女性が多くヒロインとして設定されたのは、作者の少年時代から成長するまで常に同年代の異性として存在したからに他ならない。それら作者の分身たる男性主人公を前提にまとめると、私塾での学習を主とする少年期、公学校から高等学校での就学期、日本留学における大学就学期間、大学卒業後の都会での職探しから故郷での再出発といった流れとなる。これら男性主人公の大学卒業という高学歴取得の目的が脱封建社会と都会生活の念頭にあったことは「地方生活」、「土の匂ひ」の冒頭におけるそれぞれ主人公の卒業と帰国後の都会での職探しに奔走した様子に示



されており、本来は脱封建社会に伴う都会での立身出世が念頭にあったことが明らかである。また以前の作品において新女性がそれら男性の理想の相手に設定されたのも、男性主人公にとって新女性たる相手が自身の価値観に共鳴し、かつ都会進出をめぐる脱封建と近代的生活が望める存在になるであろうと見込んだからだと思われる。

即ちかつて新女性像が往々に男性主人公の理想像たる方向に描かれたことに関して、女性人物の思想性や将来的展望は関与しておらず、あくまでも常に男性主人公側の異性憧憬における理想概念の寄託があったと仮定されるのである。

以上の理由から、以下では男性主人公との関連性を考察し、男性主人公造詣が基本になされた新女性像設定の様子に関して論を進めたい。

5.1 男性主人公の新女性に対する異性憧憬に関して

張文環作品における新女性の設定には往々に男性主人公の異性相手としての要素があることは前述した。だが、初恋、恋人関係などで示された両者の関係は、その手段が自由恋愛であることで物語ではいずれも円満な将来性が描かれず、結果は失恋や破局があるのみである。理由の一つとしては女性側が封建制度の守られた地方社会出身ということもあるが、根本的な要因となるのが男性主人公側の身分、将来性における現状と、主にその男性の立場を支持する作者の主観性である。

張文環小説作品のインテリ型の男性主人公(学校教育をうける前の少年人物を含む)は多くは身分的には無産階級の出身、或いは資産の乏しい小資産家階級の生まれで、その高学歴取得における専攻が文学、哲学であることから将来的に立身出世の望めない人物となり、封建社会においては女性の結婚や縁談の相手としては常に無縁な状況に置かれていた。以下は「山茶花」賢に関する引用である。

しかし賢はさいはいに高等学校に這入ることが出来た。皆は喜んでくれるだらうと思つてゐたが、案外医専に這入つたのではないので親類達も大して喜ばなかつた。賢が医者になつてくれれば、村に帰つてきたら面倒を見てくれることもあるだらうが、文科となると、本島人では役人になれさうもないし、また中学の教員になれるかどうかこれも問題である。高等学校の文科なら弁護士になれる学校にも入れるときくが、しかし出世がまはりくどくいやうで、賢の家と親しくする者が少なくなつて行つた。金を借りられる恐れがあるので、親類や友人達はそれで



遠ざかつて行つた。²⁵

伝統的な地方社会における婿選びは経済状況や将来性が問われるものであり、作者の描いた男性主人公は常に縁談や結婚をめぐる遣り取りの蚊帳の外に置かれた。このような男性主人公の境遇において、彼らは年齢的にはまだ青年期にあり、往々に反封建制への生き方を体現する意味と異性憧憬を満足させる意味のどちらにおいても都会進出に伴う自由恋愛に憧れを懐く傾向にあった。だが、「落蕾」義山、「山茶花」賢、「土の匂ひ」清耀（日本留学出発前の段階）の場合は恋人関係だったヒロインに別の男性との縁談がもたらされ、日本への留学開始と共に恋人関係が解消される。そして、「父の要求」阿義、「頓悟」為徳の場合は将来的な立身出世が見込めないことで相手女性への片思いの思念を懐いたまま徴兵に応じる。最も手痛いのが「地方生活」澤が日本留学期間において、片思いの相手であった「某美術研究所の女留學生」から澤が文学専攻で将来性を見込めないことを理由に男女関係を拒絶された経緯である。以下は関連箇所引用である。

澤はそのとき、某美術研究所の女留學生に心を奪はれてみたので、故郷のことを顧みる心の餘裕がなかつた。しかし、所詮それが現代女性の虚榮の縮圖であり、一とたび背負ひ投げを喰はされると、澤の心は嵐の後のやうにすさんでいても周囲の静けさに蘇生へつてくるのである。文學と美術はよき友と甘えてみたが豈計らんや、それは現實の生活に何んの經濟的な根據を持たないのを知ると冷然として自分の姿に立ちかへつた。學校を出ても、それは一失業者の端くれであり、自惚れてみたことが少しつづ削られていつた。²⁶

近代化と資本主義化が進み、功利的価値観が公に認められた新たな社会的価値観のもと、文学や哲学専攻のそれら男性主人公は道徳的、人道的価値観を重視し、優れた人格形成を勉学の中心的価値として認める。だが、それは儒教道徳が学問の異本と認められた旧社会の知識人に該当するものに過ぎない。即ち、現実的にはこれら男性主人公が新女性との関係をめぐり、いずれも恋愛や結婚をめぐる敗者的立場に甘んじざるを得ない状況にあったのは当然の理だと言えるのである。男性主人公側の生き方における弱点は己の思想性や人格の純粹さや潔白を貫き、その学業を直接的に功利

²⁵ 同注7、p.241。

²⁶ 同注16、p.282。



的な立身出世と結び付けなかったこと、そして異性に対する見方では当時の封建社会に生きる女性が運命的に縁談や結婚の束縛を拒絶できないという現実の姿を認識していなかったことである。そのことは「落蕾」義山の秀英に対する「彼女はやつぱり普通の女だった、思ひ切ったことがやれない。こんな田舎で単調な、何の刺戟もなく成長してきた彼女にとっては身分も違ふ程の金持からの縁談程大きな刺戟はなかった」²⁷という失望の思いを込めた一言にも表れている。

即ち、現実的な意味における新女性は男性側の如く自由恋愛を絶対的な価値観とは認めるものではなく、常に女性の一生に関わる封建的結婚を意識するものであり、またその思想性においても自己の社会的な生活基盤の確立や生存を意図する意味での利己的、打算的な要素を強くする存在に過ぎないものなのである。男女の破局を境に新たに描かれた新女性の「地方生活」淑はこの利己的、打算的な性格面のみが強調されているが、それはある意味、新女性に裏切られた男性主人公の女性観を反映しており、男性主人公の立場にあった作者による現代女性への批判や報復とも見られるのである。

5.2 男性主人公の新女性に対する幻滅に関して

「地方生活」淑で、「土の匂ひ」阿鶯の両者に共通するのが社会の現実を把握し、結婚に有利な女学校卒業の高学歴を有すること、利己的、打算的な思想性を強く持ち、かつ考えを実践に移せる能力が備わっていること、そして相応の高い身分や地位を有した男性との結婚を実現したことである。これら女性は常に自己の社会的生存を第一義として考えており、その要たる結婚に対しても念頭にある相手男性は医者、公学校訓導、弁護士などであり地位や将来性が全てとなる。いっぽう男性主人公のうちの「地方生活」澤、「土の匂ひ」清輝は、すでに日本留学を終えて帰国し、都会での職探しに失敗した後、故郷での生活を決意した段階にある。すでに新女性は過去の存在となり、新たな異性憧憬の相手となるのが新女性とは価値観の対立する伝統的女性である。「地方生活」淑、「土の匂ひ」阿鶯の登場はこれら新たな新女性像と対比された人物造詣の意図が強い。

男性主人公側の欲求に応じるべく、新たにヒロインとして設けられた伝統的女性「地

²⁷ 同注3、p.20。



方生活」婉仔、「土の匂ひ」玉鑾は両者とも「山茶花」に登場した錦雲の延長上の人物であり²⁸、それが新たな男性主人公の異性憧憬の対象となり、かつ相応の理想的、非現実的な造詣が施されている。ここで言うところの伝統的女性の理想像とは、伝統的な教養を培い儒教道徳に忠実な知識人タイプ女性である。そして、その原型となるのが前述した伝統的女性の理想形、即ち古典的女性の「山茶花」錦雲であり、作品には「殊に姉嬢の漢文の出来ることは母にとっては奇異にかんじ、昔のお姫様の産れかはつてきたやうに思はれて何事につけても娘に一目置いてみた。」²⁹と述べられ、「古典的で可憐」、「懐古的でロマンチック」、「女の標本のやうに見えて、凡べての女性の模範のやうに思はれる」³⁰など教養面、性格面とも作者による相当の理想化が施されており、同じ部類の造詣では「地方生活」の婉仔³¹の他、「土の匂ひ」の姉(主人公輝清の姉)³²が挙げられ、これらは全て錦雲の延長上の人物像であると言える。また「土の匂ひ」玉鑾の場合は、親の命により嫁入りし不本意な生活を強いられた錦雲のその後の生活を連想させる人物となっている。いずれにせよ、新たに主人公男性の恋愛、結婚の相手として設けられたヒロイン像は「懐古的でロマンチック」に過ぎた非現実的な描写が払拭できず、かつて作者が描いた新女性像ヒロインと同じく作者の主観的な理想化の傾向が濃厚となっている。要するにこのような人物の造詣上において非現実的で観念的と感じられる伝統的女性が設けられた背景には、かつて男性主人公を裏切った(或いは失望させた)新女性への不満や未練が残されていたことが主な要因であり、

28 「地方生活」婉仔と錦雲との接点はすでに本文中で前述してある。また玉鑾と錦雲の接点となるのが、錦雲が結婚後、虐げられた生活を強いられ孤独な生活を余儀なくされていたことが「山茶花」に書かれているが、古典的女性として性格描写の類似する玉鑾はこの錦雲或いは錦雲と同じ性格の女性が離婚したことを想定して設定されたものと思われる。

29 同注7、p.46。

30 同注7、p.47。

31 伝統社会では良家の女性にとって漢文教育は必須であった。以下は作品よりの引用である。「澤が本を讀んでみると、婉仔がきて、澤の漢文教科書をとつて、すらすらと讀むことがあるので澤は目を見張つた。第一課の日出山上と云ふ所は婉仔には餘りやさしくて、赤坊の本みたいだと偉らさうな顔をして、澤を見返したりして威張つた。」(「地方生活」、p.279)

32 以下は「姉」が新女性から古典的女性へと変化した様子が示された箇所引用である。「女學校三年生の時、家事上のことで中途退學しなくてはならなかつた。姉は性格的にやゝもするとひがみがちげあつた。だが家事の手傳ひをする傍ら、毎夜、父から四書五經をおしへてもらつたりした故か、姉はすっかり家庭的な娘になつて、ひがみ所か、父の帳簿を手傳ふ事に興味をおぼへ、かへつて朗らかになつたやうであつた。」(「土の匂ひ」、p.13) 続いて、以下はその性格描写に関する箇所引用である。「いはゆる古い型の美人で帳簿は父親よりも慥かに上手だ。その上、國文も漢文も達者で、そんなところから田舎では評判になつてゐた。謙讓で何事を言はれてもハイハイと素直に受け、我慢強くもあるので、一見無性格のやうに見えるけれども、それでゐて風に柳のたとへの通り、折れさうでなかなか折れぬねばり強さがある。父も姉を信用して、山の竹紙製造工場との取引の會計は一切姉にまかしてゐた。」(「土の匂ひ」、p.13)



ここに作者は両者間の極端な性格面の対比を通じその新女性批判を展開したものである。

だが、いっぽう、男性主人公の異性憧憬の対象が伝統的女性に移ったことで、新女性に余分な非現実的な要素が排除され、同時に実在性、客観性、現実味が加味された結果、より完成された典型的な人物像になったことが認められることになった。「地方生活」淑、「土の匂ひ」阿鶯の性格面においては前述した「地方生活」の「某美術研究所の女留學生」を指して作者が「現代女性の虚榮の縮圖」と論じたことに関連し、ここには新女性像に対する作者の理想概念の払拭、及び男性人物の主観性から離れた作者の第三者的な立場における性格描写が施されていると言えるのである。

6. 結論

張文環の小説作品は多くリアリズムを追求したことで知られるが、初期作品の新女性ヒロイン像に関すれば、その多くが作者の主観的な異性憧憬の要素が拒めず、結果として人物像の実在性を低めたものとなった。今回、今回の論文で示した主な事柄がヒロインとして登場した新女性像に含まれる主観的理想概念と虚構性を有する人物造詣の実態であり、客観的存在といえる現実像のありかたである。長期にわたり新女性をヒロインとして登場させながら、最終的な結論として「地方生活」、「土の匂ひ」に描き出した新女性像の造詣から理解できる作者の新女性に対する見方とは、主にそれが封建社会出生である限り、たとえ反伝統的な性格を有し近代的な知的側面を持とうが、都会的、進歩的なインテリ女性としての生き方は期待できない存在であり、それらは世間一般に見られる己の生活を重視して生きる一人の俗世間的な女性に過ぎないというものである。



参考文献

1. 底本

張文環(中島利郎編)『日本統治期台湾文学 台湾人作家作品集 第四卷[張文環]』。1版。東京:綠蔭書房。1999年7月20日。

張文環(中島利郎編)『日本統治期台湾文学集成2 台湾長編小説集二』。1版東京:綠蔭書房。2002年8月31日。

張文環「部落の元老」、『臺灣文藝』第三卷第四・五合併号。1936年4月。台中:臺灣文學奉公會。^{3 3} p.2~17。

張文環『地に這うもの』。1版。東京:現代文化社。1975年9月15日。

張文環「土の匂ひ」。『臺灣文藝』第一卷第三号。1944年7月。台中:臺灣文學奉公會。^{3 4} p.1~46。

張文環「泣いてみた女」。台北:『臺灣文藝』第二卷第五號、1935年5月5日。

張文環『張文環全集』。台中:台中縣立文化中心、2002年3月。

2. 研究論文

丁鳳珍『台灣日拋時期短篇小說中的女性角色』(成功大學中國文學研究所碩士論文)。1996年。

中島利雄「張文環作品解説」。『日本統治期台湾文学 台湾人作家作品集 第四卷[張文環]』。1版。東京:綠蔭書房。1999年7月20日。p.335~345。

柳書琴・陳萬益・中島利郎編「張文環著作年譜」。『日本統治期台湾文学 台湾人作家小説集 第四卷[張文環]』。東京:綠蔭書房、1999年7月20日。p.347~359。

吳麗櫻「張文環小説中女性題材之研究」(中興大學中國文學研究所 在職班 碩士論文)。2004年。

柳書琴(中島利郎訳)。「張文環『山茶花』解説—部落から東京へ、進退窮まった植民地の青年たち」。『日本統治期台湾文学集成2 台湾長編小説集二』。東京:綠蔭書房。2002年8月31日。p.355~388。

陳英仕「張文環『山茶花』析論」。『臺灣文獻』179。2012年3月。p.155~196。

張文薰「由『現代』觀想『故郷』—張文環<山茶花>作為文本的可能」。『台灣文學研究學報』第二期。2006年。p.5~28。

張文薰。『植民地プロレタリア青年の文芸再生:張文環を中心とした「フオルモサ」世代の台湾文学』(東京大学大学院人文社会系研究科中国語中国文学専攻 修士論文)。2005年。

張文薰(中島利郎訳)「立身出世を求める青年たち—『風俗小説』張文環新論—」。『日本台湾学会報』第4号。2002年7月。p.56~80。

野間信幸「張文環の文学活動とその特徴」。『関西大学 中国文学会紀要』第13号。1992.04.03。p.164~184。

許惠玟「張文環小説的女性形象分析」。『臺灣文藝雜誌』166、167 期合刊本、1992年。p.11~39。

蔡瑩慧「張文環の『山茶花』に見られる女性像—従順と抵抗のはざまに—」(銘傳大學應用日語系碩士論文)。

³³ 底本:『新文學雜誌叢書33』(台灣:東方文化書局)所収の復刻本。

³⁴ 同注34。



2008年。

洪郁如『現代台灣女性史 日本の殖民統治と「新女性」の誕生』。東京：勁草書房、2001年11月20日。

津留信代「張文環作品裡的女性觀—日本舊殖民地下的臺灣」。『中國文學評論』復刊第1號、1993。

